



## 目 次 (CONTENTS)

創立 40 周年記念シンポジウム「東南アジア 研究の継承と展望」と記念式典を挙行政 ……	2-4
<i>CSEAS Celebrates 40th Anniversary with an International Symposium and Workshop</i>	
40 周年記念 DVD『東南アジア研究』 —創刊号からのあゆみ— 発行 ……	4
<i>40th Anniversary DVD “Forty-two Years of Southeast Asian Studies”</i>	
日タイ拠点大学ワークショップ開催 ……	5
<i>Core University Program Workshop in Kyoto</i>	
第 7 回京都大学国際シンポジウム開催 <i>The 7th Kyoto University Symposium</i> “Coexistence with Nature in a ‘Glocalizing’ World”	
「地域情報学の創出」ハノイ・プロジェクト ……	6
東京とハノイで連続シンポジウム開催 <i>A Symposium Series “‘Hanoi Project’ of Development of Area Informatics” in Tokyo and Hanoi</i>	
東南アジアセミナー「東南アジアを超えて—— 華僑・華人研究のフロンティア」開催 ……	7

<i>Southeast Asia Seminar “Beyond Southeast Asia: New Perspectives on Overseas Chinese Studies”</i>	
地域研究コンソーシアム活動報告 <i>Report on Japan Consortium for Area Studies</i>	
人事 <i>Personnel Changes</i> ……	8
<栄誉> <i>Award Winners</i> ……	9
藤田幸一助教授 (Dr. Fujita Koichi) Dr. Caroline S. Hau	
<i>Colloquia</i> ……	10
<東風南信> <i>Reflections</i> ……	11
<i>Coping with Retirement</i> A. Terry Rambo	
<海外疾病だより> <i>Getting Sick Here and There</i> …	12
<連絡事務所だより> ……	13
<i>Letters from Liaison Offices</i>	
出版ニュース <i>Publication News</i> ……	14
<i>Kyoto Review of Southeast Asia</i>	
研究会報告 <i>Report on Seminars</i> ……	15-16
<Visitors’ Views> ……	16-18



創立 40 周年記念シンポジウム「東南アジア研究の継承と展望」が元外国人研究員を招聘して、京都大学百周年時計台記念館で開かれた (10 月 28 日)

(関連ページ 2-4 ページ)

創立 40 周年記念シンポジウム  
「東南アジア研究の継承と展望」と記念式典を挙  
行  
2005 年 10 月 28 日 京都大学百周年時計台記念館

1965 年に官制化された東南アジア研究センターは、2004 年度に東南アジア研究所となり、地域研究を先導する組織として全学的な活動も担うようになった。グローバルな地域研究が求められる現在、以前にも増してその役割は大きくなっている。組織の「賞味期限」が 10 年ともいわれるなかで、不惑の齢を迎えることができたことは、創設時以来の諸先輩方のご尽力と知的格闘の賜である。

設立の頃は、一握りの先進国の研究者が主導した東南アジア地域研究も今では、当該地域出身の人々が担うものともなった。こうした変化を背景に、40 周年記念委員会は、過去数 10 年間に客員として京都に長期滞在した東南アジア出身の研究者を地域、世代別に招いて、東南アジア研究の回顧と将来を展望した。さらに、東アジア研究者も加えた議論の場をもった。

IT 時代において地域に関する情報は、加速度を増してめまぐるしく変わる。同時に、地域に関わる者は時間を経て確かなものとなる「遅い情報」があることも気づいている。組織はそのような知を身体

化する人に依存する。東南アジア研究所は常に内外に開かれた知的環境を培い、志ある者の知を貪欲に受け容れてきた。ディシプリンを横断する地域研究には単一の「原論」がない。しかしそれに対する明確な「構え」は創設期から引き継がれている。

地域は足の裏にあるといった先達がいる。その足とは、研究者のみならず、そこで暮らす人々のものである。学際という実践は、研究者の間だけでなく調査地域の住民との関わりの中かで顕現した。「地」に「知」を求めて創始された京都産東南アジア研究は、先達の知的遺産を統合し独自の発信波をもって 50 年目へと向かう。

もっとも、組織は今回配布された DVD 版『東南アジア研究』と同じである。それは作者の意図と無関係に一人歩きして評価の目に晒される。270 人が参集した記念祝賀会は、40 年のねぎらいとともに、速い情報を選択し、蓄積された遅い情報を扱う地域研究の「哲学」を語り合う場ともなった。

(文責：林 行夫)

**CSEAS Celebrates 40th Anniversary  
with an International Symposium and Workshop**

The Center for Southeast Asian Studies at Kyoto University recently celebrated its 40th anniversary by organizing an international symposium on “Southeast Asian Studies: Institutions and Interventions.” The symposium was held on the afternoon of October 28 at the Kyoto University Clock Tower Centennial Hall.

In his welcoming address, CSEAS director Prof. Tanaka Koji charted the transformation of Southeast Asian studies in Japan. He noted that from the beginning, the Center has hewn to the three principles of fieldwork-based, interdisciplinary (uniquely inclusive of the natural sciences), and contemporary approaches to understanding Southeast Asia. Recent decades, however, have seen a shift in the orientation of area studies from interdisciplinary collaboration towards more individual- and discipline-based research.



Prof. Reynaldo C. Ileto



Prof. Shamsul A.B.



Prof. Taufik Abdullah

## 40 周年記念式典開催

40 周年記念式典は、記念シンポジウムにひきつづき午後 4 時半から京都大学百周年時計台記念館において執り行われた。開式の辞ののち、まず、田中耕司所長が式辞として、東南アジア研究センター発足から 40 年間の歩みを紹介し、最後にセンター発足から現在にいたるまでの過程で、東南アジア研究に尽力された各位に対する感謝の念を表明した。ついで尾池和夫京都大学総長は、その挨拶として、これまで東南アジア研究においてもたらされた数々の業績を克明にたどり、最後に、尾池総長ご自身が地震研究者としての若かりしころ、主任教授の推薦でアジアの地震研究のために東南アジア研究センターへの赴任を真剣に考えられたいきさつなどを披露された。来賓としては、文部科学省研究振興局清水潔局長の代読として、同局学術機関課芦立訓課長が祝辞を述べられた。祝辞のなかで、センター発足ならびに官制化実現に尽くした当時の京都大学教官の先見性とその努力をたたえつつ、今後、わが国の地域研究の牽引役として東南アジア研究所のますますの発展を文部科学省としても期待しているむねのメッセージを伝えられた。次に来賓としてスピーチにたたれた人間文化研究機構長・石井米雄先生は、ご自身、研究センター発足時の 4 人の教官のひとりであり、元センター所長の立場から、「来



記念式典で式辞を述べる田中所長

賓」ではなくセンターを担ってきた OB のひとりとして、発足当時の熱い思いを述べられた。

その後、バンコクならびにジャカルタ連絡事務所の現地職員のかたがた、またタイ、インドネシア、ミャンマー、中国の研究者や関係者から届いたビデオメッセージが披露され、本研究所らしい東南アジア的雰囲気のもりあがりのもとに式典は終了した。

なお、司会進行は研究所・副所長の松林が務め、多数の非常勤研究員、院生たちによって舞台設定が担われた。式典参席者は 245 名であった。

(文責：松林公蔵)

↙ For the symposium, the Center invited four of the region's leading scholars—Prof. Shamsul A.B. of Universiti Kebangsaan Malaysia; Prof. Reynaldo C. Ileto of the National University of Singapore; Prof. Taufik Abdullah of the Indonesian Institute of Sciences (LIPI); and Prof. Charnvit Kasetsiri of Thammasat University (retired) to



Prof. Charnvit Kasetsiri

reflect on their experiences in institution-building, their academic and activist pursuits, and the history, contexts, trends, research agendas, and prospects of Southeast Asian studies as a field of study and action. The Center's own Prof. Yamada Isamu, as well as Prof. A. Terry Rambo of Khon Kaen University (Thailand) and Prof. Shiraishi Takashi of the National Graduate Institute for Policy Studies served as discussants. The participants all have close connections to the Center, either as visiting scholars or faculty members.

The speakers and discussants provided an overview of the history of Southeast Asian studies in their respective institutions. They also gave assessments of the current state of Southeast Asian studies in the areas of scholarship and research-related activities, institutional exchanges and linkages, and the promotion of region-wide networks, cutting-edge scholarship, and social activism. ↗





In addition to the international symposium, the Center initiated a workshop on “East Asian Networking for Southeast Asian Studies.” Chaired by Prof. Hamashita Takeshi, the workshop was held the morning after the October 28 symposium. Five special guests from China, Taiwan, and South Korea, namely Prof. Liao Shaolian, Deputy Director of Xiamen University’s Center for Southeast Asian Studies in China; Prof. Hsin-Huang Michael Hsiao, Executive Director of Academia Sinica’s Center for Asia-Pacific Area Studies (CAPAS) in Taiwan; Prof. Yoon Jinpyo, Director of the Korean Institute of Southeast Asian Studies (KISEAS); Prof. In-Won Hwang, Head of the International Cooperation Division

of KISEAS; and Prof. Young Hun Koh of the Hankuk University of Foreign Studies in Korea briefly introduced their research institutions and gave presentations on the current state of Southeast Asian studies in their respective countries. Members of the CSEAS faculty and the symposium participants joined in the brainstorming session and came up with proposals for establishing linkages and exchanges between and among Northeast and Southeast Asian institutions and scholars.

(Reported by Caroline S. Hau)

## 祝 賀 会

40周年式典終了後には、京都大学百周年時計台記念館国際交流ホールで祝賀会が開催された。山地秀俊国立大学附置研究所・センター長会議第3部会長と家田修地域研究コンソーシアム会長（北海道大学スラブ研究センター前センター長）の祝辞のあと、市村眞一元東南アジア研究センター所長の音頭で乾杯、元教員・事務職員を含む270名の関係者がなごやかに歓談した。会場内には創設時から現在にいたるまでの写真、年表、紹介パネルなどが展示され、参加者は当時を懐かしんで見入っていた。



## 創立40周年記念DVD『東南アジア研究』 —創刊号からのあゆみ— 発行

創立40周年記念事業委員会は、東南アジア研究センターが官制化された1965年に先立って、学内措置として設置されたセンターの季刊誌として1963年6月に創刊された『東南アジア研究』の第1号（1巻1号）から2005年の42巻4号に掲載された論文、資料・研究ノート、書評、現地通信、短報、及び巻頭言など、すべての報告を収録した『東南アジア研究』DVD版（非売品）を刊行した。

本DVDは、東南アジア研究センターの当初のモットーであった、フィールド調査、学際性、現代性を反映して、自然科学分野から人文・社会科学分野にわたる多様な分野の報告・論考が全文テキスト（PDF画像）として含まれている。本DVDの制作を担当した地域研究情報ネットワーク部編集室及び情報処理室では、目次を対象にしたキーワードの指定、あるいは目次の一覧からの検索ができるように、また、新たに作成した『京都大学東南アジア研究所40年のあゆみ』（40年間の東南アジアにおける主なできごとを含む）の年表からも検索ができるように工夫した。

このDVD版『東南アジア研究』が、我が国におけるこれまでの東南アジア研究の軌跡をふりかえる資料として、そしてまた、将来の東南アジア研究の発展を展望する資料となることを願っている。今後とも、多数の論文の投稿をお願いすると共に、査読・校閲などを通じて『東南アジア研究』の刊行にさまざまな形でご協力頂きたい。このDVDに関するお問い合わせは当研究所編集室まで。

（文責：柴山 守）

## 日タイ拠点大学ワークショップ“Toward a New Model of East Asian Society: Entrepreneurship and the Family” 開かれる

去る10月14日および15日に、東南アジア研究所とタマサート大学との間の拠点大学事業による国際ワークショップが、京都大学百周年時計台記念館において開催された。これには、タイから17名、インドネシアから5名、マレーシア、フィリピンから各々2名、さらに中国、シンガポール、韓国、台湾、ベトナム、米国から各々1名が参加した。また



30名の日本側研究者が報告者として参加した。初日は、共同研究「東アジアを拓く人々——新たな東アジア政治経済モデルを求めて」グループが主体となり、まずゲーリー・ハミルトン氏による東アジア経済に関する基調報告に対し、杉原薫氏がコメントを行った。その後、「レントシーキングと経済システムの転換」「企業家精神とアジアのネットワーク」「公式・非公式な暴力と社会変化」「社会的抗議行動と変化する協治」の各セッションが開かれた。2日目は、共同研究「変貌する家族」グループが主体となり、落合恵美子氏による基調報告の後、「家族の内的機構」「家族のイデオロギーと表象」「家族——今日と未来」のセッションが開かれた。両グループの参加者は、ワークショップにおける議論により問題意識を共有することができ、また、今後4年間の研究計画を策定することができた。

(文責：水野広祐)

## 第7回京都大学国際シンポジウム開催される

11月23、24日の両日、バンコクのナイラートパークホテルにて、第7回京都大学国際シンポジウム「地球・地域・人間の共生——フィールド・サイエンスの地平から」(Coexistence with Nature in a “Glocalizing” World: Field Science Perspectives)が開催された。

尾池京大総長、タイ学術研究会議事務局長、およびチュラロンコーン大学、タマサート大学、カセサート大学の各総長の挨拶によって始まったシンポジウムは、「インド洋における最近の災害から学ぶ」



「健康、疾病、老化と地域性」「熱帯における人間と自然の共生システムの復興」「グローバル化する世界での共生のための新たなパラダイムを求めて」の4セッションの他、21世紀COEプログラム「世界を先導する地域研究拠点の形成」に関する特別セッション、2つの特別講演(チェンマイ大学 Nidhi Aeusrivongse 教授の「タイ史の輪郭」、石井米雄先生の「グローバル化する世界での他の文化との共生」)、ラウンドテーブル・ディスカッション「京都とタイの間にわれわれが学んだもの」、そして大学院生によるポスター・セッションという盛り沢山の内容をこなし、盛大のうちに2日間の日程を終えた。京大からは東南アジア研究所のほか、アジア・アフリカ地域研究研究科、農学研究科、情報学研究科、医学研究科、防災研究所が参加した。(文責：藤田幸一)





「地域情報学の創出」ハノイ・プロジェクト  
東京とハノイで連続国際シンポジウム開催

今秋（2005年）、当研究所（基盤研究（S）「地域情報学の創出」）主催による国際シンポジウムが東京とベトナムのハノイで連続開催された。

まず、10月1～2日の2日間、国際公開シンポジウム「ハノイ1000年王城——地域情報学と探る」（東京シンポジウム）が東京大学で開催された。本シンポジウムでは、歴史学会長 Phan Huy Le 教授を団長とする9名のベトナム訪日代表団を招聘して、ベトナムの首都ハノイの中心に現出した7-19世紀の大都城タンロン遺跡の保存と継承について、また最新の地域情報学の手法を導入したハノイ史研究の展開について熱心な討論を行い、2日間で100名を超える参加者があった。



当日は、田中耕司所長の開会挨拶、及び東京大学桜井由躬雄教授、日本ベトナム空間情報学コンソーシアム藤田崇代表（大阪工業大学名誉教授）、ベトナム政府官房高等専門官 Pham Xuan Canh 氏の挨拶に続き、本基盤研究（S）「地域情報学の創出」の研究代表者である柴山が「地域情報学と探るタンロンーハノイの歴史遺産」と題してハノイ・プロジェクトの基調報告を行った。一般講演では、ベトナム考古学研究所副所長 Tong Trung Tin 氏、ハノイ市人民委員会・タンロン1000年記念運営委員会 Tran Quang Dung 氏、昭和女子大学菊池誠一教授、国立西洋美術館青柳正規館長などによる報告が行われ、最後に Phan Huy Le 教授による「タンロン皇城遺跡区域の保存方法」の講演で幕を閉じた。

東京シンポジウムに引き続く連続シンポジウムとして、11月12日及び14日に“Geo-Informatics



for Historical Studies in Asia”が、同月13日に“Digital Preservation of Historical Heritage in Thang Long - Hanoi based on Area Informatics”（ハノイシンポジウム）が、ハノイ市内のサンウェイ・ホテルで開催された。

本シンポジウムでは、“Regional Collaboration and Digital Resource Sharing for Promotion of Urban History”をテーマとして、アジアにおける歴史GISと地域情報学の視点から、タンロン遺跡とハノイの歴史遺産の保存及び継承について熱心な討論が行われた。参加者は、タイ8、カンボジア1、中国1、米国5、日本24、及びベトナム96の計135名に上り、13日当日の様子はハノイテレビ放送のニュースで放映された。

当日は、田中耕司所長の開会挨拶に続き、日本ベトナム空間情報学コンソーシアム代表 Nghiem Vu Khai 氏ほか各国3名の挨拶のあと、東京大学桜井由躬雄教授による「前近代のハノイ都市計画」ほか、12日及び14日の2日間にわたる6つのセッションで14件の講演が行われた。また、13日の国際シンポジウムでは、田中所長の開会挨拶、在ベトナム日本大使館大内晃参事官、ハノイ鉱山地質大学前学長 Bui Hoc 教授の挨拶に続き、柴山が「地域情報学と探るタンロンーハノイの歴史遺産」と題して基調報告を行った。

本年は、基盤研究（S）「地域情報学の創出」のコア研究であるハノイ・プロジェクト（5年計画）の初年度にあたり、本シンポジウムを機会に地域情報学の展開を一層進めたいと考えている。

（文責：柴山 守）

## 第 29 回東南アジアセミナー 「東南アジアを超えて——華僑・華人研究のフロンティア」開催

第 29 回東南アジアセミナーは、9 月 5 日（月）から 7 日（水）まで、実施された。テーマは『東南アジアを超えて——華僑・華人研究のフロンティア』。近年グローバリゼーションの動きに対応して「東アジア共同体」といった新しい地域政策などが提起される一方、東南アジア各地で中国問題・中国要素が複合的に登場し、東南アジア・中国双方で、華僑・華人に対する新たな関心が生まれてきているという認識を背景に、地域やディシプリンを超えた議論の場から、「東南アジア研究」と「華僑・華人研究」の新たな課題や今後の可能性を探った。1. 地域とネットワーク、2. 華人と政治・経済、3. 新《華僑・華人》ネットワークとトランスナショナリズム、4. 新華僑とビジネス、5. 文化・アイデンティティ・歴史、6. 華僑・地域研究・歴史というサブテーマのもとにセッションを設定。論文執筆中の大学院生や若手研究者を主な対象とし、インテンシブな討論の場を実現することが目指された。講師、助手レベルから学部生まで 25 名の受講生は、あらかじめ各

講師から指定された必読文献を読んでセミナーに臨み、各セッションでコメンテーター、司会、記録係などの役割を積極的に果たした。また企画された 6 セッション以外にも、グループ討論やパネルディスカッションの時間が設けられ、早朝から夜遅くまで、文字通り密度の高い討論漬けの 3 日間であった。

（文責：小泉順子）



2 年目を迎えた地域研究コンソーシアムは、萌芽的ではあるが実質的な活動を展開し始めている。7 月 9 日には、地域研究コンソーシアム・シンポジウム「新しい地域研究の方法を求めて——地域の形成と変容のメカニズム」を北海道大学学术交流会館において開催した。これは、地域研究コンソーシアムと国立民族学博物館地域研究企画交流センター、北海道大学スラブ研究センター、京都大学東南アジア研究所、21 世紀 COE プログ

### 地域研究コンソーシアム 活動報告



ラム「現代アジア学の創生」、21 世紀 COE プログラム「スラブ・ユーラシア学の構築」の主催による学際的、地域横断的な試みである。このような意見交換の積み重ねを一つの突破口として、次の地域研究を切り開いていかなければならない。また 4 月 9

日には、社会連携研究会が「緊急支援から地域復興へ——インド洋地震・津波災害と地域社会」を上智大学中央図書館において開催した。これは緊急支援に携わった研究者や NGO メン

バーの報告をもとに、実務家と地域研究者の機動性・柔軟性のある連携・協力関係の構築に向けた試みである。これも次の地域研究に向けた重要な第一歩である。さらに、教育・次世代育成や研究資源の共有化のための組織横断的な活動も始まった。新たな地域研究の展開に向けて、コンソーシアムという土壌から少し芽が出てきたような気がする。

（文責：河野泰之）

# 人 事

## 教員人事

### <新任>



**長津一史** 助手（2005年5月1日付）。

1992年3月上智大学外国語学部ロシア語学科卒業。98年3月京都大学大学院人間・環境学研究科文化・地域環境学専攻博士課程研究指導認定退学。同年4月日本学術振興会

特別研究員（PD）、2000年5月京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科東南アジア地域研究専攻地域進化論講座助手。

#### 〔主要論文〕

Pirates, Sea Nomads or Protectors of Islam? A Note on “Bajau” Identifications in the Malaysian Context. *Asian and African Area Studies* (『アジア・アフリカ地域研究』) 1, 2001. ▽『正しい』宗教をめぐるポリティクス——マレーシア・サバ州、海サマ人社会における公的イスラームの経験『文化人類学』69(1), 2004. ▽「越境移動の構図——西セレベス海におけるサマ人と国家」『海域アジア』関根政美・山本信人（編）（叢書現代東アジアと日本4）所収，慶應義塾大学出版会，2004.

### <昇任>

河野泰之助教授は、12月1日付け統合地域研究研究部門教授に昇任。

## 外国人研究者人事

### ■外国人研究員



**Thongsay Sayavongkhamdy**（ラオス）。ラオス情報文化省博物館考古局長。2005年5月18日～11月17日。「ラオス文化財保存の東南アジアのコンテクストにおける比較研究」

**Pham Tien Dung**（ベトナム）。ハノイ農業大学農学部上席研究員。2005年6月20日～12月19日。「ベトナム北西域ティ少数民族における焼畑農耕とその保全に関する研究」

**Wynn Lei Lei Than**（ミャンマー）。イエジン農業大学図書館主任司書。2005年7月1日～12月31日。「ミャンマー農業に関する目録編纂」



**Mochtar Pabottingi**（インドネシア）。LIPI 政治開発研究センター長・上級研究員。2005年7月20日～2006年1月19日。「二級民主主義の系譜」



**Phanu Uthaisri**（タイ）。ラジャマンガラ工科大学講師。2005年8月1日～2006年7月31日。「歴史・考古へのGIS応用に関する研究」



**Ratana Boonmathya**（タイ）。マヒドン大学地域開発・言語文化研究所専任講師。2005年9月20日～2006年3月19日。「移動と記憶——ディアスポラの世界における『場』と『場の転移』」

### ■招へい外国人学者

**Liu Hong**（中華人民共和国）。シンガポール国立大学人文社会科学部助教授。2005年10月6日～12月31日。「日本における中国系新移民とその本国との関係1978-2005」

### ■外国人共同研究者

**Muthayya Vemuri Chowdary**（インド）。インド宇宙研究機構研究員（SEレベル）。2005年9月27日～2007年9月26日。「ラオス北部の山地部を対象とした持続的流域管理のための生態史GISモデリング」



藤田幸一助教授が

第9回「国際開発研究 大来賞」を受賞



このほど、第9回「国際開発研究 大来賞」が藤田幸一助教授に贈られた。この賞は、国際開発の分野で大きな足跡を残され、(財)国際開発高等教育機構(FASID)初代評議員会会長を務められた大来佐武郎氏の功績を記念して、国際開発の様々な課題に関する優れた指針を示す研究図書を顕彰するため、同財団が平成9年(1997年)に設けた賞である。

受賞対象作品は、同助教授が本年1月に上梓した『バングラデシュ 農村開発のなかの階層変動——貧困削減のための基礎研究』(「地域研究叢書」16 京都大学学術出版会刊)であった。本書は、バングラデシュにおけるさまざまな農村開発政策が、いかに

普及し農村の下層民にまで裨益していったのか、その過程を「階層格差の変動」という視点から統一的に分析することで、途上国農村の市場の機能についての新しい理解を示した意欲作である。受賞理由に「本書は著者の経験と努力と能力が結実したまれにみる労作である。丹念な分析とともに、根拠の薄い通説を打破しながら新たな『正論』を打ち立ててくれているのが本書の魅力」と述べられている。

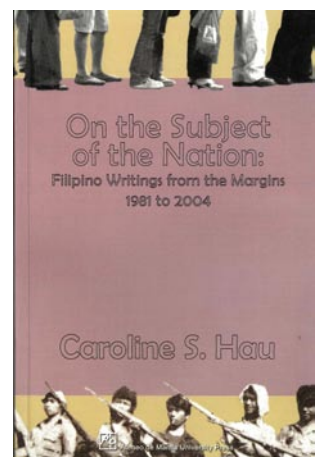
本書は、バングラデシュについての研究成果であるが、同助教授は、現在ではミャンマーとラオスの農村経済に関するフィールド調査に着手しており、ミャンマーについてはその成果が、本年、編著『ミャンマー移行経済の変容』としてアジア経済研究所より刊行された。同助教授の今後益々の研究の発展を期待したい。

なお、表彰式ならびに藤田助教授による記念講演会が2005年12月6日にFASIDで行われる予定である。

**Dr. Hau's latest book has been awarded the Philippines' National Book Award for Literary Criticism**

CSEAS Associate Professor Caroline S. Hau's *On the Subject of the Nation: Filipino Writings from the Margins, 1981-2004* (published by Ateneo de Manila University Press) has been given the Philippines' 2004 National Book Award for Literary Criticism by the Manila Critics Circle in cooperation with the National Commission for Culture and the Arts. Awarding ceremonies were held on September 4, 2005 in Manila.

The book was cited for "demonstrating dramatically how powerful literary criticism is in unlocking the mysteries not just of what can be read on paper but of what can be and is being lived in real life by the powerless, the ignored, and the othered."



Every year since 1982, the Circle has given the National Book Awards to the best books written, designed, and published in the Philippines. Two previous works by Hau, *Necessary Fictions: Philippine Literature and the Nation, 1946-1980* (Ateneo de Manila University Press, 2000) and *Intsik: An Anthology of Chinese Filipino Writing* (Anvil Publishing, 2000) were also National Book Awardees for Literary Criticism and Anthology respectively.

## COLLOQUIA

© “What Is Area Informatics? The Application of GIS to Historical and Archaeological Studies” by *Shibayama Mamoru*, May 23, 2005.

As can be seen from the utilization of Geographical Information System (GIS) and Remote Sensing (RS) in area studies, informatics is already being actively incorporated into advanced research. However, the case studies, experience, and research results currently available are insufficient. Informatics can provide area studies with new approaches and knowledge, but only with the further development of the field through its application to area studies. Since this development is important for both area studies and informatics, a new project, based on a JSPS Grand-in-Aid of Scientific Research (Category S), has begun to create the new discipline of Area Informatics. The colloquium introduced the 5-year project, “Development of Area Informatics with Emphasis on Southeast Asia,” which started from April, 2005.

© “The Social Backgrounds of ‘Islamic’ Political Leaders in Indonesia after 1998” by *Miichi Ken*, June 23, 2005.

Since 1998, for the first time in nearly 40 years, Indonesia has enjoyed political freedom. Not a few observers have argued in favor of the emergence of “political Islam” and the radicalization of Islam in Indonesia. Of the 10 biggest parties which took part in the 1999 election, 6 are Islamic parties. Who are the newly emergent Islamic political leaders? Where and how did they study? This presentation examined the social, educational, and ideological backgrounds of new Islamic political leaders in Indonesia. The division between Islamic and nationalist parties has been emphasized, and, in fact, the Islamic-to-nationalist ratio in the 2004 election results was close to that of 1955; however, the meaning is very different. Islamic party leaders today have mostly been educated in secular schools, while many nationalist party leaders have attended Islamic schools. Ideologically speaking, the importance of secular nationalism has declined, but there is still general agreement about the “nation state.” Islam is promoted not as a religion in a narrow sense, but through social and political activities motivated by an “Islam” that should deal with “worldly” issues.

© “Who Are They/We the Karen? Representation and Life Strategy in the Case of an Eco-Tourism Village” by *Hayami Yoko*, July 11, 2005.

The Tribal Research Institute in Chiang Mai was dissolved in 2002, four decades after its foundation. Although this was part of a larger bureaucratic reform, it reflects the changing representation of the “hill tribe Other” by the state. Recently, discussions regarding the Karen as forest inhabitants have been promoted strategically in laying claim to Karen rights to make a living in these habitats. Varied attempts to define the Karen have reflected the interests of those in the lowlands and beyond, and Karen themselves have selectively adopted these imposed views as well in claiming their own rights. As a result, they have found increasing voice in the ongoing debates. I began by discussing evolving representations of the Karen and then examined the grounded living strategies employed by Karen in an eco-tourism village.

© “Smelling the Roses while Dodging the Bullet: The Dilemma of the Area Studies Approach in War Zones” by *Patricio N. Abinales*, September 22, 2005.

Fieldwork-based studies conducted in war zones present some problems for the researcher. The volatile condition in a combat area not only poses a serious threat to one’s life but also acts as an obstacle to the successful gathering of field data. Communities caught in the middle of powerful armed combatants often have difficulty sharing their stories with an outsider for fear that it would further compromise their already stressful lives. Even ecological investigations can be undermined because of the damage done to the topography and environment. One encounters these problems in studying southern Philippine politics. This lecture gives an overview of the turmoil in the island of Mindanao and the difficulties in coming out with a comprehensive portrait of everyday life there. It will also bring to the fore for discussion and debate the issue of how area studies scholars must relate their perspective with the realities of political violence and war.

## COPING WITH RETIREMENT

By A. Terry Rambo

Retirement, like death and taxes, is an unavoidable event in most people's lives. Despite its inevitability, however, few of us are adequately prepared for retirement, as I personally discovered after I retired from Kyoto University in 2004. In the hope that former colleagues at CSEAS who are themselves approaching retirement age might benefit from my experience, I would like to share some of the lessons I have learned about coping with retirement. Basically, it all comes down to planning ahead to deal with a new and different way of life:

*Make a financial plan:* Because I had neglected to make a financial plan before I retired, the cutting-off of my regular monthly paycheck induced a deep sense of financial insecurity. I became needlessly worried that I was spending more than I could afford. For example, I agonized for several days about whether I could afford to buy an interesting new book that I found at the annual KKU book fair. I even switched from drinking Kloster to Chang beer to save a few baht. But worrying about money took much of the pleasure out of life. Finally, I did what I should have done before retiring—I made a detailed analysis of my income and expenditures. This revealed that my pension income was sufficient to cover my needs. I can't buy a new Mercedes every year but I don't have to lose sleep over buying some new books. Once I knew what my real financial situation was, I found I could relax and begin to enjoy retired life without worrying about counting every penny.

*Plan how to spend your time:* At CSEAS I was continuously busy with teaching, attending seminars, and sitting through seemingly endless meetings (especially on the dreaded last Thursday of the month). I assumed that after retirement I would finally have free time to do the research that I really wanted to do. But that's not the way it worked. I had essentially limitless time but, curiously, that time did not get put to productive use. The books I wanted to read remained unread, the papers I planned to write remained unwritten. Whole days passed without my having accomplished anything worthwhile. I knew

that something was badly wrong when the high point of my day became the delivery of the morning newspaper. At that point, Gene Wicklund, a friend who had retired several years before me, advised me to get some structure into my life. This was sound advice. As soon as I began teaching regularly scheduled classes at KKU, and once again had some fixed time points around which to organize the rest of my life, my sense of malaise disappeared. And despite complaining sometimes that I am working harder now than before I retired, I am finally actually doing some of things that I had always hoped to do after retirement.

*Plan ways to maintain social involvement:* While I worked at CSEAS, most of my daily social interactions occurred with colleagues and students in the Center. Retirement necessarily brought these interactions to an abrupt halt leaving me feeling quite isolated and lonely. Fortunately, I soon developed new social relationships with colleagues and graduate students at KKU. For many retirees, however, especially in Japan, social isolation is a very serious problem. We all have heard of individuals who have become alcoholics or even committed suicide in response. Planning ways to maintain a high level of social interaction should be a high priority for anyone approaching retirement.

*Accept your new status and enjoy it to the maximum:* Finally, rather than viewing retirement as a bad thing, let yourself enjoy the advantages it offers. You really do have much greater control over your life so that you can spend your time doing whatever it is that gives you the greatest satisfaction. It may be gardening, or traveling, or doing volunteer work but however you spend your time it will be the result of your own choice. Once you recognize this, you are well on your way to coping with retirement.

(Special Professor, Khon Kaen University; Professor of CSEAS, 2000 ~ 2004)





## 海外疾病だより *Getting Sick Here and There*

「海外疾病だより」では、過去2回にわたって所員や大学院生がフィールドで罹患したデング熱、肺炎、急性腎盂炎などについての報告を掲載してきました。これらの疾病だより医学の立場からコメントをいただきました松林教授に、今回は「病気の概念」についてのエッセイをお願いしました。

### 病気の概念——3つのパラダイム

松林公蔵

「病気」をあらわす英語には、語感を異にする3つの概念がある。Disease、Illness、Sicknessである。

Disease（疾病）という語は、人間になんらかの症状をきたす原因、例えば、ウイルス、細菌、腫瘍、中毒などを特定し、どのようなメカニズムでその異状がもたらされるのかを明らかにし、どう対処すれば科学的に適切か、という近代科学に基づいた原因志向的概念ともいえる。したがって、Diseaseの究極の解決は、完治である。

一方、Illness（やまい）という語は、疾病の結果として患者が体験する苦痛、自覚症状、不安など、患者の主観的体験のありようを重視する概念である。患者が治療を求めるのは、Diseaseではなく、むしろIllnessである場合も多い。高度に発達した先進医療と併行して、鍼灸などの東洋医学や種々の栄養サプリメントなどの代替医療が求められるのは、Illness側の主張ともいえる。Illnessの究極の解決は「癒し」であろう。Diseaseは治ったが、Illnessは癒されていない、あるいは逆に、Diseaseは未完治だが、Illnessは十分癒されたという場合もあり得る。

Diseaseを解きあかそうとする近代医学の論理は、客観性、再現性、普遍性といった、いわゆる科学的根拠に基づいた優れた利点はある。しかし、個人のそれぞれに異なる価値観に応じた要請には十分に答えられないという冷徹な欠点をもまた併せもっている。それに対して、いわゆる東洋医学あるいは代替医療は、経験則に基づくものであるゆえに科学的ではない反面、個人の体型や反応、情感を非常に重んじる包括的な暖かさをもっている。

第3の病気の概念は、Sickness（病的状態）とい

う語であらわされる。Sicknessは、IllnessやDiseaseが「正常ならざるもの」「善からぬ状態」「異状」として社会化された概念である。ハンセン氏病は、癰菌がひきおこすDiseaseであり、Illnessとしては、皮膚症状や神経麻痺のようなやっかいな症状をもたらすが、患者がもっとも苦難を覚えるのは、社会化されたSicknessであろう。Sicknessの究極の解決は「復権」である。

近代医学の発展は、患者の苦痛をとまわず社会も病気とはとらえていなかった状態から、さまざまな「病的状態」を発見し、社会化してきた。高血圧、高コレステロール血症など、将来の心血管事故の発生を統計確率的に高めるリスク因子は、Diseaseではあるかもしれないが医師から知らされない限りIllnessではなかった。しかし、医師からその存在を指摘されて以降は、Disease、Sicknessと自覚するようになる。

病気の概念、さらにまた個人の疾病観には、地域固有の生態系や文化の影響が色濃く反映される。「病気」もまた、地域研究の重要なテーマと思われる。  
(研究所教授)

#### <来訪者>

2005年7月12日 Md. Hedayetul Islam Chowdhury (バングラデシュ農村開発省) ▼9月12日 Tea Seang Hourng (カンボジア日本協力センターライブラリーマネージャー) 他2名 ▼9月16日 Ruth Hiyob Mollel (タンザニア高等教育省次官) 他2名 ▼9月21日 インドネシア・プサントレン・マドラーサ代表団一行 ▼10月5日 タンロン遺跡東京シンポメンバー一行12名 ▼10月13日 Paul H. Kratoska (シンガポール大学出版局所長代理) ▼10月18日 Anna Lowenhaupt Tsing (カリフォルニア大学バークレー校教授) ▼10月31日 Michael M. H. Lim (アジア開発銀行上級専門員)

## 連絡事務所だより

バンコク

Bangkok

荒井修亮

今回は、夏期休暇中の7～9月の駐在である。昨年、1カ月間駐在したので要領はだいたい分かっていたものの、運転手が交代したり、車が新しくなったりと幾つかの変化はあった。丁度、車の保険の切り替えがあり、コンケーンの車に問題が生じた。強制保険が切れているという。フロントガラスにステッカーが貼っていないと警察に拘まるらしい。これは日本と同じ。龍谷大の舟橋先生に連絡、こちらで保険料を立て替え、ステッカーを郵送。本件に関しては後日、舟橋先生と相談し、保険料の立て替えについては、今回限りとし、保険をコンケーンで新たに契約することとした。

事務所内のLAN環境であるが、幾つもあったインターネットの契約を、常時接続下り1Mの1本に整理し、その他は全て解約した。多少の経費削減にはなる。事務所内では一応、無線LANでどこからでも接続可能である。デスクトップをプリンターサーバとして使いたいと試みたが、どうやってもMSネットワーク

ジャカルタ

Jakarta

インドネシアにおける野外生物学の可能性

百瀬邦泰

世界で最も多くの種が生息している国の最有力候補はインドネシアだ。ライバルはペルーあたりだろう。植物に関しては $\alpha$ 多様性（群集内の共存種数）で同程度かややペルーが優勢だが、環境傾度や地史的な背景の多様さ（ $\beta \cdot \gamma$ 多様性）を考慮すれば易々と逆転する。陸上の他の生物の種多様性は、植物の多様性と相関する。一方、水棲生物の種多様性はサンゴ礁が圧倒的であり、インドネシアの多島海に比肩しうる地域はない。

当然、多様な生物がいるほど学問的発見の機会も多いし、解きほぐすべき因果関係の量と興味深さも大きい。今後ますます多くの野外生物学者の目がインドネシアに向くことになるだろう。

しかも現在のインドネシアは、外来者にとって、生物についての野外研究をやりやすい国のひとつである。滞在費や人件費の安さ、調査許可の取りやすさ、現地協力研究者の優秀さや親切さ（人と組織によるが）、過去の程よい研究の蓄積とそれへのアクセスのしやすさ、などがその理由である。

実はこれらのうちいくつかの要素ではパナマやコスタリカが圧倒的に優位に立つし、実際発表される研

## Letters from Liaison Offices

クでリソースへのアクセスができない。仕方なく、自分のPC3台それぞれにプリンタードライバーを入れることでコピー機をプリンターとして使用可能とした。なお、コピー機はスキャナーとしても使えるので、論文の添削指導の際、重宝する。駐在中、院生の中間報告会等、論文添削の機会が多々あったが、メールとチャットの活用で問題なく対応可能であった。今回の駐在中、事務所で映画の上映会を行った。これは、バンコク在住の院生等が主体的に行っている研究会の一環である。

直井里予監督の“Yesterday Today Tomorrow”の上映と、監督とのディスカッションである。朝日新聞などでも取り上げられたHIV感染者のドキュメンタリーである。撮影の裏話など、興味深い話を直接監督から伺えたことは有意義であった。折角の連絡事務所である。院生たちがもっと気軽に集って、お互いの切磋琢磨に十二分に活用されることを期待したい。

（京都大学大学院情報学研究科助教授）

究の数でみてもそれらの国での調査に基づくものがこれまでは多かった。しかし、肝心の学問的発見の機会や解きほぐすべき因果関係の量と興味深さは、そろそろ中米の小国では頭打ちになりそうだ。したがって近い将来、インドネシアが野外生物学の中心となる可能性は充分ある。

インドネシア固有の利点に加え、日本の野外生物学者がインドネシア研究に参入する利点も大きい。その利点とは、モンスーンアジアや多島海という連続性で居住地と訪問先を繋ぐことができるということだ。インドネシアに対して、居住地と連続した「比較」や「括り」の視点を持てるという特権に、日本の野外生物学者はもっと気付くべきだと思う。

また、インドネシアの農学・生物系研究者には日本で学位をとった人が多い。こういうことを無邪気に喜ぶのは帝国主義的発想だろう。しかし留学先と本国とを、連続した「比較」や「括り」の視点で結ぶことができる人がインドネシア側にも増えているとすれば、純粋に学問的成果として喜んでいいと思う。

というわけでもう一度ジャカルタ連絡事務所に派遣してもらえる機会があれば、野外生物学支援体制を整えてみたい。  
（研究所客員部門助教授）

◇『東南アジア研究』43巻1号

*Southeast Asian Studies* 43(1)

「インドネシアにおける地方政治の活性化と州『総督』の誕生——バンテン地方の政治：1998-2003」岡本正明

▼ Small Arms, Romance, and Crime and Violence in Post WW II Thai Society. Chalong Soontravanich ▼ Deconstruction and Reconstruction

of Native Customary Land Tenure in Sarawak. Dimbab Ngidang ▼ Policy and Politics Related to Thai Occupied Forest Areas in the 1990s:

Democratization and Persistent Confrontation. Kurashima Takayuki and Monton Jamroenprucksa ▽ 書評 (Book Reviews) Abdul Rahman Embong, ed. *Globalization, Culture & Inequalities: In Honor of the Late Ishak Shari*. 吉原久仁夫 ▼ Anna M. Gade. *Perfection Makes Practice: Learning, Emotion, and the Recited Qur'an in Indonesia*. 小杉麻李亜 ▽ 現地通信 (Field Report) 「Tsunami と GIS」柴山 守

◇『東南アジア研究』43巻2号

*Southeast Asian Studies* 43(2)

Factors Associated with Emergence and Spread of Cholera Epidemics and Its Control in Sarawak, Malaysia between 1994 and 2003. Patrick Guda Benjamin, Jurin Wolmon Gunsalam, Son Radu, Suhaimi Napis, Fatimah Abu Bakar,

Meting Beon, Adom Benjamin, Clement William Dumba, Selvanesan Sengol, Faizul Mansur, Rody Jeffrey, Nakaguchi Yoshitsugu, and Nishibuchi Mitsuaki ▼ Mangrove Plantation and Land Property Rights: A Lesson from the Coastal Area of South Sulawesi, Indonesia. Andi Amri ▼ Government and Multinationals: Conflict over Economic Resources in East

Kalimantan, 1998-2003. Wahyu Prasetyawan ▼ 「タイ近代国家の蹉跎——人民党政権による警察改革の試みをめぐって」水谷康弘 ▽ 書評 (Book Review) 玉田芳史. 『民主

化の虚像と実像——タイ現代政治変動のメカニズム』船津鶴代

出版ニュース  
Publication News

◇研究報告書シリーズ (Research Report Series)

■ No. 107. 柴山 守. 2005. 『古文書文字認識システムの高精度化に関する研究』

◇その他の出版物

■ 藤田幸一編著. 2005. 『ミャンマー移行経済の変容』アジア経済研究所.

■ Patricio N. Abinales and Donna J. Amoroso. 2005. *State and Society in the Philippines*. Lanham, MD: Rowman & Littlefield.

*Kyoto Review of Southeast Asia*

<http://kyotoreview.cseas.kyoto-u.ac.jp/>

The theme of Issue No. 7 of the *Kyoto Review of Southeast Asia* will be on borders, with Dr. Alexander Horstmann of the Institut für Ethnologie, Universität Münster, in Germany as guest editor. The issue will feature a review of the literature on Southeast Asian nomads, essays on vigilantes and gangsters in the borderland of West Kalimantan, the smuggling of guns and gas between Southeast and South Asia, nation-states and land rights, gendered border crossing, and the violence in southern Thailand. There will be also short reviews on books dealing with the theme.

Issue No. 7 will also feature the *KRSEA*'s new website. We have contracted the services of the Philippine-based web-maker group, Squeaky Studios, for the new website that will have audio and video capabilities and a more colorful design. The web makers are also redesigning the comments section to attract more readers to send in their comments, and possibly create a

new section where we can post covers of new books published in Japan and Southeast Asia with pop-ups describing their contents and their authors.

Finally, we hope to add to the core languages of *KRSEA* (Bahasa Indonesia, English, Filipino, Japanese, and Thai) two more languages: Mandarin and Korean. The addition will depend on how fast we can get our colleagues in southern China and South Korea to suggest translators.

Even as work on the new web design continues, we have already begun contacting potential authors to contribute to Issue No. 8, which will have as its theme, "Culture and Literature in Southeast Asia."

Because of the shift to a new website, the issues of *KRSEA* will be slightly delayed this year.

(Reported by Patricio N. Abinales)



◆ Special Seminar on “Changes in Rural Livelihood and Agriculture during the Last 20 Years in Northeast Thailand”

Viriya Limpinuntana (Visiting Research Fellow, CSEAS) “The Changing Conditions and Future of Rice Growing in Northeast Thailand” ▽ Miyagawa Shuichi (Gifu University) “From the 1980s to 2000s at Don Daeng Village: Rice-base Farming System,” May 9.

◆ Special Seminar

Pongsak Sahunalu (Visiting Research Fellow, CSEAS) “Community Dynamics of a Tropical Seasonally Dry Forest with Special Reference to Deciduous Dipterocarp Forest in Northeast Thailand,” May 24. ▼ Somluckrat Grandstaff (Visiting Research Fellow, CSEAS) and Terry B. Grandstaff (Visiting Researcher, CSEAS) “Changes in Human Adaptive Strategies in Rural Northeast Thailand,” July 12 ▼ K. Palanisami (Tamilnadu Agricultural University, Coimbatore and Invited Research Fellow, RIHN, Kyoto) “Tank Irrigation in South India: What is Next?” July 14. ▼ Chan Chee Khoo (Visiting Researcher, CSEAS) “Reforms in the Organization and Financing of Health Care,” July 20. ▼ Thongsa Sayavongkhamdy (Visiting Research Fellow, CSEAS) “Conservation of Cultural Heritage in Lao PDR: Issues and On-going Projects,” October 4. ▼ Pinit Laphthananon (Visiting Research Fellow, CSEAS) “The Search for ‘Development Monks,’” October 7. ▼ Eric Crystal (University of California at Berkeley) “Yao Refugees: From Highland Southeast Asia to California,” November 7. ▼ Pham Tien Dung (Visiting Research Fellow, CSEAS) “Assessing Changes in an Agricultural System in Terms of Sustainability in the Northwestern Mountains of Vietnam,” November 11.

◆ JSPS Core University Program Seminar

Srawooth Paitoongpong (Thailand Development Research Institute) “Thailand’s Cross-border Trade with the GMS: The Missing Figures,” October 24.

◆ 「東南アジアの自然と農業」研究会

第120回例会：4月22日 山尾政博（広島大学）「東南アジアの水産業開発と沿岸域資源管理——『責任ある漁業』の実現に向けて」 ▼第121回例会：6月24日 小坂康之（ASAFAS）「ラオス中部の丘陵地における土地利用と住民生業」 ▼第122回例会：10月19日 話題提供者：香西直子（愛媛大学）、コメンテーター：縄田栄治（京都大学）「タイ北部における温帯果樹栽培」

◆ 「東南アジアの社会と文化」研究会

第23回例会：5月27日 王柳蘭（ASAFAS）「移住経験と『華』人の動態的理解にむけて——タイ北部における雲南系漢人と雲南系回民の移住とネットワークの形成から」 ▼

第24回例会：9月16日 小林知（CSEAS）「ポル・ポト時代以後のカンボジアにおける農村社会の『再編』——トンレサップ湖東岸地域における調査から」

◆ 「タイ・バンコク」研究会

5月28日 生方史数（ASAFAS）「コモンズにおける集合行為の2つの解釈——どう統合できるか？」

8月27日 第一部 ドキュメンタリー上映 “Yesterday Today Tomorrow” 第二部 直井里予監督によるトークと質疑応答 ▼ 9月10日 遠藤環（CSEAS）「1980年代以降のバンコクの経済構造と就業の変化——都市下層の職業履歴と職業機会」 ▽ 三田村啓理（日本学術振興会特別研究員PD）「メコンオオナマズ追跡調査」

◆ 「地域情報学」研究会

第2回：Surat Lertlum (Visiting Research Fellow, CSEAS) “Applying Aerial Photos for Area Studies” ▽ Tharapong Srisuchat (The 6th Regional Office of Fine Arts [Sukhothai], Thailand) “Application of Geoinformatics for Cultural Heritage Management,” June 28.

◆ 「インドネシア」研究会

第3回：7月2日 見市建（CSEAS）「宣教とビジネス——インドネシアのイスラーム出版」

◆ 「農村開発における地域性」研究会

第14回例会：Hedayatul Islam Chowdhury (Ministry of Local Government and Rural Development and Cooperative) “Contribution of the Co-operative Sector in Socio-economic Development of Bangladesh,” July 12.

◆ 「比較の中の東南アジア研究」研究会

第1回例会：7月23日 玉田芳史（ASAFAS）「2005年総選挙とタックシン政権」 ▽ 大庭三枝（東京理科大学）「アジアにおける地域主義と東南アジア」 ▼ 第2回例会：9月23日 岡本正明（CSEAS）「インドネシア政治研究——権威主義体制から民主化後の政治体制について」 ▽ 村上勇介（国立民族学博物館）「ラテンアメリカ政治研究の動向と今後の課題——ペルーという周縁的事例から」 ▼ 第3回例会：10月22日 黒崎卓（一橋大学）「貧困問題・貧困分析の諸相——パキスタンでのフィールド観察と定量分析に基づく一報告」 ▽ コメント：藤倉達郎（ASAFAS）

◆ 「マレーシア・森林資源」研究会

Choy Yee Keong (Keio University) “Sarawak’s Deforestation and Sustainable Resource Management: Managing the Bakun Catchment Forest Ecosystem,” July 25.

◆ 特別研究会

9月29日 岡本郁子（アジア経済研究所）“Can Pulse Improve Myanmar Rural Economy? Changes of Income Distribution in a Green Gram Producing Area in Lower Myanmar” ↗

# VISITORS' VIEWS

## THE LAKES OF NORTHEAST THAILAND

By Somluckrat Grandstaff  
Terry B. Grandstaff

We are currently doing research in Esan (northeast Thailand) and as we travel around the region we have incidentally noticed some big changes in this region's lakes.

Many people think Esan is very dry, because it is drought prone. But there are actually many water bodies scattered around at the bottoms of numerous enclosed local watersheds that form the rolling terrain of much of this region. Small, seasonal water bodies, which dry up completely in the hot season, are called *nong*. Many of



Kaen Nakhon Lake in Khon Kaen

these have been converted to rice paddies and the lowest points deepened into ponds. In the larger watersheds are the marshy lakes, called *bung*, which have year-round water. Most *bung* are rather shallow, the boundaries shifting seasonally, often by hundreds of meters. Villages established near the *bung* could take advantage of the water and fishing and other natural foods available. Some of these settlements eventually grew into major cities.

Now urban planners are changing these larger water bodies. Some lakes within or adjacent to the cities have been preserved and developed into beautiful urban recreation areas, such as Kaen Nakhon Lake in Khon Kaen and Phalanchai Lake in Roi Et. Others, a little farther away from the urban centers, are being filled in to create new land for suburban businesses and residences, usually adjacent to a vastly reduced water storage area.

But Esan is not only drought prone, it is also flood prone, and these larger *bung* are important receptors for flood water—water that has nowhere else to readily drain to in the rolling terrain. We hope the many new inhabitants who move onto these former wetlands will not experience any unpleasant surprises during the occasional heavy rainfalls.

(Visiting Research Fellow; Visiting Researcher)

### ◆ 「国家・市場・共同体」研究会

10月3日 藤田幸一 (CSEAS) 「ミャンマーにおける農業労働者——市場経済への移行過程において」 ▼ 11月3日 「東南アジアにおける党、政治、国家」 中西嘉宏 (ASAFAS) 「革命政党を建設せよ、官僚制を破壊せよ——社会主義期ビルマにおける党、軍、国家関係 (1962-88)」 ▼ 櫻井雅俊 (名古屋大学) 「インドネシア闘争民主党组织の性格——地方党组织の私物化」 ▼ 山田裕史 (上智大学) 「体制移行期のカンボジアにおける人民党の生き残り戦略」 ▼ 瀬戸裕之 (名古屋大学) 「ラオスの部門別管理制度における県党委員会および知事の権限に関する一考察——ヴィエンチャン県工業部における事業形成過程を事例に」 ▼ コメント：岡本正明 (CSEAS)

### ◆ 英文学術著書出版に関するワークショップ

Paul H. Kratoska (Singapore University Press) “English-Language Academic Publishing,” October 13.

### ◆ 「スラウェシ」研究会

第2回：10月21日 岡本正明 (CSEAS) 「ゴロンタロ州の創設とトゥモロコシのポリティクス」 ▼ 松井和久 (アジア経済研究所) 「地方分権化制度における自然資源管理の位置」 ▼ 調査活動報告：藤田佳史 (愛媛大学) 「小スンダ列島南方海域におけるシンジャイ漁民のカツオ漁の実態と新たな市場形成」 ▼ 本多純秀 (愛媛大学) 「マングローブ地方の漁村タンガタンガの男たちと Cinta Bahari 号」

### ◆ API Fellowships Seminar

Michael Morales (Philippine Military Academy) “Building Asian Leaders: A Comparative Study of Training in the Military Academies of Indonesia, Japan, Malaysia, the Philippines, and Thailand,” October 12.

## GOING TO TEMPLES AND SHRINES

By Pinit Laphthananon



Kyoto is accepted as one of the most interesting traditional cities on earth. Since I arrived in Kyoto last April, I have been visiting various temples and shrines. One thing I noticed is that more young and old Japanese people visit temples and shrines than middle-aged

adults. Why this was so was a question in my mind for many months, and I tried to find some answers from the people themselves.

I found a chance to ask an old lady, a young girl, and a young boy the same question: “For what purpose do you visit a temple or a shrine?” The old lady gave me an interesting answer: “I come here to wish for good health and no sickness, as well as for my children and grandchildren to have a successful life in both work and study.” The young girl explained to me that she had a specific purpose: she wished to pass her exams and have a chance to study in a college or university in accordance with her educational expectations. The young boy had a different idea: “I wished for a successful life and in particular for good luck in love.” However, both the young boy and young girl told me they were not really serious in making their wishes. It just seemed to be normal religious behavior for them to come to a temple or shrine and make a wish. They also wrote their wishes on an “Ema” in the traditional way because everyone has done it for a long time.

When I asked a middle-aged man why Japanese people his age hardly come to temples and shrines, he said, “Most adults have no spare time to visit temples and shrines. We have loads of work and responsibilities. More importantly, we have nothing to wish for. We mostly have our jobs and our families.”

This is just my personal curiosity, not academic information. It may, however, reflect the religious behavior of some Japanese people who were kind enough to explain things to me in English, given my constraints in Japanese.

(Visiting Research Fellow)

## DELIGHTFUL SCENES FOR RESEARCHERS

By Pham Tien Dung



A well-known interdisciplinary scientific research center, which is 40 years old, is located just on the bank of the Kamo River. This quiet river is ideal for someone who wants to relax after working many hours in the office by watching herds of pigeons dancing on the

lawn or fish-catching birds standing in the river ready for their catch. The place is also not far from the city center, where cultural, sporting, performance, and even shopping activities are very lively on the weekends. Everything necessary for your life and research is just a 20-minute walk from this center, the Center for Southeast Asian Studies (CSEAS), Kyoto University, Japan.

Coming into the Center, it seems as quiet as the Kamo River, but naturally it is very different. The river is often quiet and becomes very active and lively when the water level is high. The quietness of the center is only how it appears from the outside, while inside it is ebullient. The ebullience of the center is not like that of the river, which can easily be seen by outsiders. The ebullience of the center is found in weekly academic discussions, scientific concepts, and thoughts that are developing in the minds of the researchers. They may look like they are quietly sitting in their rooms, but they are not quiet; they are discovering the mystery of the natural world and the truth of life.

Because scientific knowledge needs proof, information is required for the researchers’ studies. Aside from field trips, it is the Center’s library and its library network where much of the information comes to lend proof to their concepts. Going into the library, a two storied-building, we can use an enormous volume of books and journals of all kinds, and it is all maintained by just a few librarians who are quietly hard-working and very enthusiastic.

Thus, at the Center, researchers have the impressive library, the city, and the Kamo River to help them feel at home. At the conclusion of animated academic discussions, they have books and journals, collegial friendships, and the relaxing atmosphere of the Kamo River. For all this, for the chance to enjoy these delightful scenes, the author needs to thank the Center.

(Visiting Research Fellow)



## ONCE A LIBRARIAN, ALWAYS A LIBRARIAN

By Wynn Lei Lei Than



When I was young, I never dreamt of becoming a librarian, which I thought would be a very boring kind of job. But in 1996, three years after my graduation from Yangon University, I joined the Yezin Agricultural University

Library as a library assistant. As I knew nothing about library services and the duties of library staff, I attended a two-year library and information studies diploma course at Yangon University in 1997. With my postgraduate diploma in LIS, I came to know that I am really interested in this field of study.

I became the librarian of YAU Library in 2000, and it has been a great challenge for me. I have to determine how the library shall be run and to ensure that it is run properly and effectively. The library was founded in 1924, at the same time as the university. It supports study and teaching at the university and provides services to the students

and staff. The library's collections are mainly focused on resources for agricultural and related courses. It became a depository library of the FAO in 1999 and has received a copy of every FAO publication free of charge since that time. The FAO also provides our library with free access to more than 700 major scientific journals in agriculture and related technologies through AGORA (Access to Global Online Research in Agriculture).

It is a great opportunity for me to be a visiting research fellow at CSEAS, Kyoto University. I have been compiling a selective annotated bibliography of books and other research materials on Myanmar agriculture and also processing Myanmar books which have been collected by the CSEAS library. During my stay in Kyoto, I have had a chance to visit many key institutions and libraries in Kyoto, Osaka, Tsukuba, and Tokyo. I have also been able to see the people, the culture, and the beauty of Japan, and I am very impressed to see such marvelous things. I am sure I will be able to impart and apply my knowledge and experience gained in Japan to my colleagues and library at home.

(Visiting Research Fellow)

## 研究所ホームページが新しくなります

2006 年公開予定。

URL <http://www.cseas.kyoto-u.ac.jp>

(アドレスに変更はありません)

- ☛ 一目で内容がわかるトップページ  
トップページが充実！掲載している情報を系統的・網羅的に示しました。
- ☛ 「映像で見る東南アジア」の新設  
東南アジアの過去と現在を、所員が撮影した写真やビデオでお伝えします。
- ☛ 研究所動向を詳細に  
私たちが何に興味を持ってどのような活動に取り組んでいるかを豊富な情報でお伝えします。
- ☛ タイムリーな情報発信  
研究会活動や客員研究員の動き、出版や資料収集などに関して研究所の「今」をお伝えします。
- ☛ 掲載情報のアーカイブ  
すべての情報が蓄積され、過去に掲載された情報にアクセス可能となります。



2005 年 12 月 1 日発行

発行 〒 606-8501  
京都市左京区吉田下阿達町 46  
京都大学東南アジア研究所  
Tel 075-753-7344  
Fax 075-753-7356  
<http://www.cseas.kyoto-u.ac.jp>  
編集 石川 登・米沢真理子